閉会のご挨拶

寺澤 捷年 先生
千葉中央メディカルセンター 和漢診療科 部長

吉益東洞先生は「天下の医者を医すに非ざれば医たりと雖も救疾の少なし」と決意し、37歳の時に故郷の広島から京都に移りました。医師の医療に対する精神構造を改めなければ日本はよくならない、というお考えですが、今がまさにその時期にあたるのではないかと思います。しかし、容易に変えることはできない、非常に根が深い問題です。

翻って、明治政府は日本を西洋諸国と足並みを揃える国家とすべく、1874年に西洋諸国の医事制度を参考とする医制を発布し、漢方医学を廃してしまいました。西洋医学と東洋医学のどちらが優れているのかを“富国強兵”の下に競ってしまったのです。

第二次世界大戦の敗戦後、わが国の社会構造は大きく変化しましたが、医学においては西洋医学を至上とする方針が未だに根強く残っていることはご存じのとおりです。しかも、財政制度等審議会の『財政健全化に向けた基本的考え方』(平成26年5月30日)では、社会保障の公的給付範囲の見直しの中で、「漢方薬などの“市販類似薬品”の更なる保険適用除外を進める必要がある」とさえ記されています。

しかし、真実は覆い隠せないことは、本日のシンポジストのご講演からも明らかです。わが国は西洋医学と東洋医学の両方を保険診療できる唯一の国です。2つの医学の競い合いではなく、“いいとこどり”をしてそれぞれをカバーしあうことによって、世界最高の医療を患者さんに提供することができると思います。

本日は5名のシンポジストから、まさに最高の医療が患者さんに提供されたことを、私も、そして皆さんにも感動していただけたのではないかと思います。

ご清聴いただきありがとうございました。